

人権ネットワーク八幡

NEWS

事務局 〒523-0857 近江八幡市八幡町170(旧八幡教育集会所内)
電話 【携帯】 080-2525-7114(高坂)
【メール】 Tko_koj1224@yahoo.co.jp

<ARCHIVE/アーカイブ>

10月26日号で紹介した『月間キリスト』(1970年10月号)の記事の後編を掲載します。前回は八幡支部青年部の「解放キャンプ」でしたが、後半は解放キャンプから1週間後の「フォーク・キャンプ」に関する記述です。

「熱く燃える若者の湖」(後編)

② クールな湖に、ホットな若者たち

解放キャンプからちょうど1週間経った8月14日から始まる「フォーク・キャンプ」にひかれて、ビワ湖の深い深い湖底の底に吸い寄せられるように、またぞろ近江八幡へやって来た。解放キャンプは、近江八幡の湖岸、新畑のキャンプ場であったが、こんどは、その近江八幡の目と鼻の先の湖の真ん中に浮かぶ島、沖の島(沖島)。



沖の島には、小さな漁村があるだけで、自動車もない。あったところで、だいいち走れるような道がない。周囲5キロの山を浮かべたような島。参加者も、キャンプの資材も、近江八幡の町の西にある八幡山をぐるっとまわった長命寺の港から、チャーターした漁船で運ぶ。

＜ギターを抱える高石ともやさん、正面で手拍子の西井義さん(本会代表)と中村さん＞

前の日の13日は、1日じゅうカンカン照り。日かげもなんにもない島の浜では、設営がはじまっていた。設営場所は小学校の運動場用にと、自衛隊が山をくずして土を盛った所。主催者のひとりであり、スポンサーである高石ともやくんも、アメリカ帰りのヒッピースタイルの髪をふりみだして、テントを張ったり、クイを打ったり、排水溝を掘ったり、大活躍だったとか。

14日も、クールな湖の水を輝かせて、ホットな夏の太陽が昇る。そして、クールな問題をかかえたホットな若者たちが集まって来る。

台風が近づいていて、風が強い。小さな漁船のへさきに真っ白にしびきがあがる。若者たちを乗せて、しかし漁船は軽快にはしる。沖の島の南のはしをぐるっとまわると、テントのならば浜が見えてくる。目標になるのは、コカ・コーラの赤と白のダンダラのテント。コークはやっぱり若者のものだ。

矢のように雲の流れる空がくらくらした。対岸のあたりが湖水に映る。さあ、フォーク・キャンプのオープニングだ。オープニングといっても、セレモニーもなにもない。

♪陽気に行こう 陽気に行こう 陽気に行こう どんなときにも
苦しいことは わかっているのさ さあ、陽気に行こう

ウタがあるだけだ。大テントの下に陣どったみんなの手拍子がいって、ともやくんのウタは、たちまちみんなのウタになる。

♪しあわせをつくろう しあわせをつくろう とびきり上等の しあわせをつくろう
笑顔をつくろう 笑顔をつくろう とびきりあかるい 笑顔をつくろう
あしたをつくろう あしたをつくろう とびきりすばらしい あしたをつくろう

ちょっと実存的な、ちょっぴり哲学的なウタがとび出す。

♪なま身のからだは 死にたえて あとにのこるのは ただ“ことば”
ことばが 死体をだきしめて “なみだ”という ことばを えらび出す
ヴォキャブラリーの中にある “愛”をたまたま えらんだ人は 愛をたらいまわしにして
ほんとうの“愛”は 死にたえた

裏面へ→

このウタは、そんなに陽気には聞かれない。みんな、シーンと静まりかえっている。ヒザッコゾウをかかえたやつ、手をつなぎ合っじゃがみこんだカッコイイふたりづれ、ポツンとひとり立ったままのジープの女の子。

ときどき大粒の雨が降りかかって、サーッと通りすぎる。通りすぎたあとに、月が顔を出す。思い出したようにはげしい風が、テントを打つ。リズムがはげしくなると、いろいろの楽器が生まれる。バケツもあれば、木の箱もある。

午後10時、ラジオは台風が近いというが、ウタは止まない。ウタが止むのは、若者がいなくなったときだけだ。ともやくんが、ギターをかかえてみんなの中にはいつて来ると、夜とウタは最高潮になる。

しかし、その夜はたいへんなことになった。午後2時、手拍子もギターもまだまだ止みそうにないのに、風にあおられて大テントがたおれた。台風は、若狭湾に近い。一時避難だ。吹き飛ばされないようにテントをたたむと、はげしく打ちつける雨の中を村の公民館とお寺に避難。水はけの悪いところは、泥沼のようになってしまった。

たいへんな夜だった。しかし、日が昇ったら、またはじめなければならぬ。テントを張りなおして、メシもつくらなければならぬ。それだからウタがうたえるのだ。フォークが生まれるのだ。うたえない現実を、うたえる現実に変える力も生まれるのだ。(完)

山形県米沢市に行ってきました



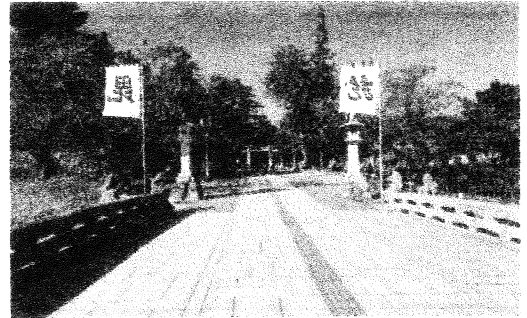
＜上杉博物館＞

10月末、一泊二日の日程で山形県米沢市を訪ねました。目的は、同市の上杉博物館で例年この時期に公開される国宝『上杉本 洛中洛外図屏風』の見学です。室町末期、上杉謙信に贈られたこの屏風絵の一角に八幡の左義長のルーツになるとされる当時の京の町での左義長が描かれており、本物を眺めると共に同館の学芸員さんからこの左義長について色々教えてもらいました。お陰で左義長祭りについて多くを学ぶ事ができました。

米沢市の第一の“押し”は勿論「上杉家」。米沢城跡の中に建つ上杉博物館に隣接する上杉神社には上杉謙信、景勝、鷹山の歴代有名当主や直江兼続等の銅像が並び、仙台の伊達政宗生誕地の碑もありました。お宮は七五三の親子連れや老人会のツアー客で一杯でした。

次の“押し”は「米沢牛」。駅のホームに牛の銅像があり、市内の飲食店はどこも「米沢牛あります」の表示が。ラーメン屋さん「当店人気No1の焼肉定食」とか、お洒落な喫茶店に「米沢牛ステーキあります」の看板が当たり前に出ていて参りました。でも牛肉は柔らかくて脂が甘く、とても美味しかったです。

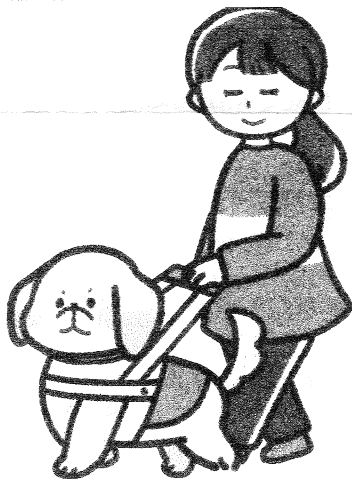
“押し”の度合いはもう抜群。近江八幡市、正直言って負けますヨ、もっと「近江牛」を推さない。うかうかしていたら、「日本三大牛肉は松坂牛、神戸牛、米沢牛」とか言われる様になったりして…。「山形鉄道フラワー長井線」の鉄旅も出来て、楽しい「みちのく一人旅」でした。(水来亭平助)



＜上杉神社＞

所外雑記

電車で盲導犬を連れた女性に出会う



用事で大阪へ行った帰り、電車で盲導犬を連れた女性が乗ってこられた。

私はすぐに、女性に声をかけて席を譲った。一緒にいた盲導犬は、ちょこんと賢く床に座っておとなしくしている。

私は、ついつい調子に乗って(?)「私の住んでいる近江八幡の団地の近所に、盲導犬を使われている一星さんという方がおられ、小学校等の授業にもよく来られています…」と話しかけていた。

すると、その女性は「一星さんなら、よく知っています。何日か後にお会いしますよ」と答えられた。

私は、ますます嬉しくなって、野洲で降りられる彼女に「墨字で失礼ですが…」と言って、人権ネットワークの名刺を渡してしまった。

後で冷静に考えたら、やっぱ怪しい変なオジサンだったかなあと、ちょっとだけ反省していた。(TK)